

1枚の場面を探す楽しさ

アマチュア写真家

澤野 二郎さん

守山市美術展覧会で写真部門の市展委員を務めるアマチュア写真家の澤野 二郎さん(守山二十日)は、これまでいくつもの講師や顧問を務めたことがあり、市内のカメラブームの火付け役でもあります。

今回は、高校時代から78歳の現在まで、カメラを手に写真を楽しむ澤野さんの、もりやま芦刈園撮影に同行させていただきました。

アマチュア写真家
澤野二郎さんのプロフィール
滋賀県写真連盟会長
滋賀県写真家協会会長
全日本写真連盟関西本部委員
全日本写真連盟滋賀県本部委員長
京都丹平会員
草映会会員



澤野 二郎さん

作品集(一部)



—山里シリーズより—

フィルムからデジタル「きれい」から「自己表現」へ

澤野さんが初めて写真を撮影したのは高校時代。初めて自分のカメラを手に入れたのは二十歳のころ。わくわくしながら撮影、どきどきしながら暗室で現像していました。

時代は変わって高性能のデジタルカメラが生まれ、フィルムにこだわっていた写真愛好家も、何十・何百

(雨の芦刈園で撮影する澤野さん)



水辺に咲き誇るショウブ



雨を受けて鮮やかなアジサイ

枚と撮影でき、撮影した画像を確認できるデジタルカメラを使うのが主流となりました。便利さと引き換えに、どんな写真になるかわからないどきどきは減ってしまいました。澤野さんも現在はデジタルカメラを愛用しています。

きれいな写真を撮る事が嬉しかった少年カメラマンは、いつのまにか写真の世界で創作や自己表現を模索する写真家になっていました。

教室講師から市内の愛好家牽引役へ

澤野さんは、昭和42年に新居を構えて守山市民となり、サラリーマンをしながら写真を撮り続けていました。

旧公民館(現在の市役所東棟)で講師に招かれ、調理室を現像室に仕立て、公民館講座の写真教室を開催したのが守山市との関わり之初。その講座には、勝島玄有氏(洋画)や酒井栄一氏(うつけ染め)など、他ジャンルの第一人者も参加していたそうです。

その後も市写真教室や愛好家クラブなどで講師の依頼は多く、市内のカメラブームの草分け、火付け役といえる存在となりました。現在も市内をはじめ近隣で、写真愛好家に影響を与えています。

撮影と家族の時間共有 生活の中で素材見つける

「プロになろうと思った

事はないです。好きなことを仕事にしてしまったら、縛られて自由にできなくて苦悩するでしょう」と

澤野さん。アマチュア写真家は自由な作品を求める事ができる反面、趣味に割く時間を取りにくい側面もあります。それでも途絶える事なく写真を撮り、続けてこられた理由は「十分にできたかどうかは分かりませんが、自分の時間と家族の時間を共存しようと心掛けていました。それと、自分ができる中で表現を求め、写真のジャンルにはこだわ

りませんでした」と忙しい時代を振り返ります。さらに「妻や家族は、結婚前からの趣味だったので、仕方ない、と諦めて協力してくれたのかも」と照れながら笑顔を浮かべていました。

変わりゆく山里を撮り続け 写真の魅力伝えたい

写真歴は約60年となり、アマチュアながら写真家として認められ、関連する団

体でもさまざまな役職を任されるようになりました。澤野さんは現在「風景というより、山里の暮らしそのものを写真で伝えたい」と、朽木や日野などを季節ごとに何度も訪ね、雲の動きや陽光などを予測したり、じっくりと待機しながら撮影を続けています。

滋賀県写真連盟会長などの役職を担う立場として今後を考えると、スマホで気軽に撮影する人がとても多くなってきた一方で、写真愛好家の高齢化(88%が60歳以上)のデータもあるそうです。や、撮影マナーの徹底など、文化芸術として写真を楽しむ環境に課題もあります。しかし、カメラは趣味として手軽であるだけに奥の深い芸術。澤野さんは、自身の撮影姿勢や作品を通してカメラマンの在り方や、自己表現や記録などさまざまな側面を持つ写真の魅力を若い人にも伝えていきたいと考えています。